

そうならないためには、教師は「最近やる気がなくなっているな」など早い段階で気付けば、まずは保護者と連携を図り、学校外での様子を聞かせてもらうことが必要である。どのような場合でも、保護者はそれぞれ我が子にどうかかわったらよいのか困っているのもので、保護者を責めることなく、本人への対応の仕方を学校と家庭で話し合っただけで協力体制をつくるのが大切である。

保護者は、子供の非行の全てを洗いざらい学校に伝えることにより、学校側から偏見をもたれたり排除されたりすることを恐れている。また、本人が「学校にチクった」と怒り家庭内暴力や非行がより激しくなることを恐れ、深刻な状況を学校にきちんと伝えず、連携が取りにくくなりがちである。そういう時には、専門機関を紹介することも大切である。

ウ 関係機関との連携

親子間、夫婦間に価値観や考え方の食い違いがあったり、本人に発達障害が疑われるような場合には、スクールカウンセラー、教育相談機関、または、発達障害に精通している医療機関を紹介することが必要である。非行が進んでいる場合や、父親が毅然とした父性モデルを示せない場合には、地域の非行グループの状況などに詳しい少年センターや地域の警察の生活安全課少年係を紹介することも必要となる。

IV 思春期における気がかりな子供たち

今回の研究で、思春期の子供たちの意識をとらえ、その上で、心理的な“生きにくさ”を症状や問題として示している臨床事例を分析してきた。ここから、思春期全般の子供たちの心理を踏まえつつ、「思春期の気がかりな子供たち」の様相を、まとめて以下に示す。

1 調査がとらえた一般的傾向

昨今、私たちは当センターの臨床事例を通して「生きにくさ」を感じている思春期の子供たちに出会うことが多くなったように感じていた。そこで、思春期の子供たちが、今どのような思いで生きているかを改めてとらえようとして、「思春期の心理と行動に関する意識調査」を作成、実施した。その中から次のような思春期心性が見えてきた。

思春期は、親への反抗心や大人への不信感を抱き、それと向かい合い、自立に向けて試行錯誤していくことが課題であると言われていた。しかし、今回の調査に見る子供たちは、全般的に家族との親和的な関係を望んでいて、その中で支えられている状況にある。同様に、友達に関しても親密で友好的な感覚をもち、人とのかかわりを求めていることが分かった。

内面的には、全般に不安感や抑うつ的な気分を抱えていて、自分の取り組んでいる状況や結果によい感触をもつことがなかなか難しく、自己肯定感が低い状況にあると考えられる。

「攻撃性」については一定の傾向はとらえられなかったが、生産的なエネルギーとして発現される方向性を併せもつことを考えると、思春期の子供たちは、個々人の状況によって、エネ

ルギーの発揮の仕方が異なっていると言えよう。また、「自暴自棄感」は低い状況にあり、危機的な状態に陥るほどの準備状態にある子供は少ないと考えられる。

しかし、具体的な行動に目を向け、心配や困難な状況に出合った時の対処方法を見ていくと、「誰かに相談する」（そう思う・少しそう思う）と答えたのは、半数の子供であった。家族や友達との関係により感触が示されているにもかかわらず、相談という対人関係上の解決行動を取ろうとする子供が半数にとどまるという結果は、課題として受け止めたい。

また、「がまんする」「悩んでいることを人に知られないようにする」「仕方がないとあきらめる」という自己統制を図る子供たちが各々半数いることも気になることである。困難な状況に対して、思春期の子供たちは往々にして抑圧的な行動様式を取ることが分かる。特に、気になることは、「体調が崩れる」とした子供が3割、危惧される対処行動である「自分を傷つける」とした子供が2割弱もいることである。このことから、日々「生きにくさ」を感じつつ、進むべき道を模索している思春期の子供たちの姿が浮かび上がってくると言えよう。

2 臨床事例にみられる子供たちの様相

来所相談事例や、また、学校でかかわらなくてはならない思春期事例は、1で述べた全体傾向に比してより先鋭的で、思春期危機のまっただ中にある気がかりな子供として私たちの前に現れる。そこから次の三つの視点が見えてきた。

(1) 心の居場所のなさ

本来、子供は人として育つ過程において、家庭で親に受け入れられて、安心してのびのび生活する中で、自立して生きていく上での、スキルや対人関係の力量を身に付けていく。

しかし、学校で出会う事例には、家庭が子供を守り、癒す場になっていないことが多く見受けられる。身体的虐待、ネグレクトなどの課題を抱える家庭ばかりでなく、一見、経済的にも生活面でも問題がないように見える家庭でも、同様のことが起こっている。子供に無関心であったり、拒否的であったり、親自身が自ら抱える問題の大きさに圧倒されていたり、自らの欲求充足にとらわれていたりする。そして、子育てどころではなく、心理的虐待と言える状況が繰り返されている場合が少なくない。第Ⅲ章で見えてきた問題のいずれをとっても、家族に真に受け止めてもらえず、問題が重症化、遷延化していく様子が見て取れる。そこには思春期によく見られる親への反抗というレベルを超えた、怒りや敵意などの激しい感情が子供の中にみられる。しかし、子供はそのような感情を抱いたことに驚き、恐怖を感じたり、またどのように処理すればよいかも分からず、もてあまし、逸脱行動に走ったり、解離症状に退行したりする。また、絶望感を抱き、自らの命を絶とうとするような深刻な事態に陥ることもある。

このように、家庭の機能が弱まっている現状では、子供にとって家庭は、学びの場、くつろぎの安全地帯ではなくなると感じられる事例に多く出会う。したがって、そのような状況下では子供は学校に安らぎまで全てを求めてこざるをえなくなっているように思われる。

今、このように学校にしか自らの居場所を求められない子供が多く見受けられる。

学校は、教師という大人がいて、そこで形成される人間関係の在り様や、関係の中で見え

てくるものを大切に育てていくことのできる心の居場所であることが、改めて求められていると思われる。

(2) 対人関係の薄さ

思春期の子供たちは、対人関係の持ち方に問題を抱えていることが多い。第Ⅲ章の事例に象徴されるように、一方的に好意を抱いた相手にストーカーのように迫ったり、誰にも悩みや葛藤を伝えられずに不登校に陥ったり、自らの命を絶とうとしたりする。また、知り合っただけの間に性的な関係に至って、学校生活に支障を来すようになるなど、人との距離が近づき過ぎたり、離れ過ぎたりして、人とかかわる上での程よい距離を保つことが困難な子供たちである。

自分の思い込みが優先され、相手のことを考えないため、コミュニケーションが成立せず、双方向のやりとりがないまま一方的な関係が進み、問題が発生することになる。人と人との関係を作る上でのスキルが発達しない中で、希薄な対人関係が広がっている。またそこには、表現の稚拙さと唐突な行動化が特徴的にみられる。発達的な認知の偏りを示す子供や、境界例パーソナリティ障害と言われるような子供も、この人間関係の混迷や不確かさの問題を抱えている。

その背景には、(1)で見てきたような、家族のコミュニケーションが成立しにくくなっているという問題が隠されている。

また、メールやネットなどによって、人と対面せずに人間関係が作られていく時代である。人と人との向かい合って関係を築いていくことが難しく、そのような関係を求めることすら嫌う人間関係の希薄さが、子供の世界にも及んでいる。

思春期の子供にとっての友人関係は、児童期の「ギャング」(注1)を経て、中学生期の「チャム」(注2)、高校生期の「ピア」(注3)とその関係を深めていくと考えられている。しかし、この仲間関係の発達的な図式が成立しにくい社会状況がある。このような同性の友人関係を十分体験することなく、異性との関係に一足飛びに入り込んで、性的逸脱行動となって現れることもある。早期に性的な関係を結んでも、親に愛されていないことの代償にはなりえず、発達過程の順序を踏まずに進むことは、真の成長につながらない。

(注1) 小学校高学年ごろ、親からの自立のための仲間関係を必要としはじめる時期に現れる徒党集団

(注2) 中学生によくみられるなかよしグループで、特別に親密な友人を言う。

(注3) 高校生くらいになると、互いの価値観や理想・将来の生き方などを語りあう関係ができる。

(3) 死への傾斜

思春期は様々な「生」に関する試みを続けていく試行錯誤の過程にあるが、すべてがうまくいくわけではなく、むしろうまくいかない状況の方が多いと言えよう。つらいことが多く意識消失を繰り返す子供、必死にもがいてリストカットをすることでアピールする子供、自らの思いを内に閉じこめて表面的には何事もなく過ごしている子供など、思春期危機にある子供たちは、“生きにくさ”を強く感じている。そして成就感のない日々が続くと、「生きていても仕方がない」「死んでしまいたい」というような思いに駆られ、絶望感や自暴自棄

感が高まっていく。そこに、進路選択、家族とのいさかいや別離、失恋など、何らかの選択や決断を迫られ、ストレスを感じて負荷が加われば、自殺念慮、自殺企図へとつながることになる。

ここ数年、子供自身による生と死にかかわる事件・事故、自殺や殺人が続いて起きている。そこには、人を求めても求められない寂しさ、孤立感、追いつめられ感、そして「死」についての距離感のなさがとらえられる。このような「生」の意味を見出しにくい状況がある中で困難な事態に対する対処方法として「死」があり、「死」が身近になってきていると言えよう。

同様に、その事件・事故と直接には関係のない周辺の子供たちも、事件・事故を知って大きな動揺を見せることがある。予想外の衝撃的な出来事に遭遇した時に、もともと心理的に不安定な状態にあると、追いつめられて、「死」との距離感が失われ、突然に「死」に近づいてしまうことがある。直接は「死」につながらないようにみえる問題においても、攻撃性の発露としての「行動化」や「非行行為」が起これ、そこにはブレーキのきかないコントロールのなさや、柔軟性のなさが内包されている。

「生」と「死」は表裏の関係にある。子供たちが「死」に近づかないですむよう、一人一人に意味あるものとしての「生」の在り様を、大人は提示していかねばならない。

しかしながら、現代の大人社会において、大人も心からいきいきと「生」を進めているとは言い難い。昨今の大人社会の殺傷事件を見ると、トラブルが生じた時、解決のためというより、むしろトラブルをリセットする手段として容易に「殺人」が用いられてしまうという、「生」が大切にされない状況がある。このことと、子供たちの「死」への接近の問題は、無関係ではないように思われる。

子供たちが示す思春期危機の様相は、様々な症状や問題を示す子供だけが突出しているのではない。日常的に学校に通っている一般の子供たちにも、危機に関する芽は潜んでいると言える。意識調査の結果からも分かるように、子供たちの意識は連続していて、危機的な状況とそうでない状況の間に、はっきりした境界線が引かれるのではない。複数の負荷が重なり合っただけで子供にかかる時、子供は危機状況に陥る。また、早くからその状況をとらえ、表現できる子供ばかりではなく、なかなか表現できない子供がいる。子供たちの発する心の叫びに、いち早く気づき、耳を傾け、その思いを受け止めていかねばならない。危機的状況にある子供たちはもちろん、今はそうでない子供たちのためにも、思春期をいきいきと生きていけるよう、大人たちはサポートしていく必要があると思われる。